

プリンツ著『はらわたが煮えくりかえる』を論じる

オーガナイザー：

信原幸弘（東京大学）

提題者：

西堤優（東京大学）

「身体性評価による価値評価とは」

信原幸弘（東京大学）

「情動の評価面と動機面はどう関係するか」

源河亨（日本学術振興会／東京大学）

「身体性の評価から価値の情動主義へ」

企画趣旨：

プリンツ『はらわたが煮えくりかえる』の原著 *Gut Reactions: A Perceptual Theory of Emotion* は 2004 年に刊行されたが、この書はそれ以前の情動に関する諸説を批判的に吟味しつつ新たな説を打ち出した画期的な著作である。それは身体性を重視する点でジェームズ＝ランゲ説やダマシオの情動論を受け継ぐものであるが、それらの説を大きく乗り越える重要な内容を含んでいる。

本書によれば、情動とは状況に対する身体反応を通じて状況の価値的なあり方を知覚的に把握し、それに応じて行動を動機づけるものである。このような見方を打ち立てたあと、それに基づいて、情動をめぐる多くの問題が検討され、それらに次々と回答が与えられていく。たとえば、情動は基本情動と派生情動に区別できるか、できるとすれば基本情動とは何か、基本情動から派生情動がどう派生するか、情動における生得的なものと教育・文化によるものはどう絡み合うか、情動は自然種として分類できるか、感情価（情動の正と負）とは何か、等々である。このような多様な諸問題を網羅的に取り上げて、逐一詳細な検討を加えている点は、本書の大きな魅力の一つである。

このプリンツの画期的な情動論が邦訳されたのを機に、それに基づいて情動をめぐる諸問題を考察してみようという趣旨で、本ワークショップを企画した。訳者も提題者として参加するので、まず、訳者が本書の概要を簡単に紹介する。続いて、3名の提題者がそれぞれの観点からプリンツの説を取り上げて、それについて自由に論じる。その内容については、各提題者の提題要旨を見ていただきたい。本ワークショップを通じて、身体性を重視するプリンツのユニークな情動論への理解の深化とともに、その問題点の明確化や新たな領域への適用を目指したい。